ブリューゲルの「子供の遊戯」5

——輪回しからお店屋さんごっこまで——

森　洋子

22、輪回し（男）Hoepelen（フランドルではreep）（図1）

既製の玩具が少なかった時代、子どもたちは身の回りの対象物を遊具とするのを常としていた。樽は今日でも使用されているが、古くはとくに物の保存や輸送のために、例えば、ビール、ワイン、バターなどの重宝された容器であった。それが廃品化したとき、子供たちは樽で種々の遊びを考えた。22、23、24番はいずれも樽を遊具としている。

「輪回し」は樽の箍（たが）を使用しているが、材質としては、鉄ないし木（図2）で形も丸いものや一本の棒を輪にしたものなどがある。すでにギリシャやローマ時代には、鉄製の輪が使われていた。しかしブリューゲルの時代では木製の箍であった。ド・マイヤーによると[注1]、半世紀前まで、フランドルの子供たちは集団をなして大通りを輪をころがして走ったという。輪を倒すことなく、一番早く、もっとも狭い小路を通って目的地に到達した者が勝

者となる。コックとテーリンクはこの輪回し競争について、勝者は一番安い硬貨を賞としてもらい、それを輪の内側につけて技を自慢した、と説明する。[注2] 十七世紀のオランダのタイル画（図3）には、それを思わせる例がみられ、輪の内側に12個の飾りがついている。そのほか、シリマンの銅版画（図4）のように、金属片をとりつけることもある。とくにその場合は輪が回るとき、カタカタという音を立て、かなりの騒音になったにちがいない。それだけでなく、この遊びは輪が思いがけない場所にころがったりするため、十七世紀、子供が道路で輪回しをするのを禁じた法令があった。ドローストによると、最古と思われる例は一四五六年のドルトレヒトの禁止令。さらに一四八五年に、同市で「ポルツィ・ランツィと叫びながら、道路で輪回しをしてはならない」という法令を出している。[注3] 「ポルツィ・ランツィ」というのは、輪回し合戦のときの「掛声」だった。[注4]

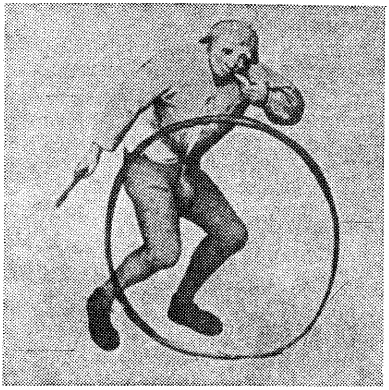

図1　ブリューゲル「輪回し」（男）
（「子供の遊戯」の部分㉒）

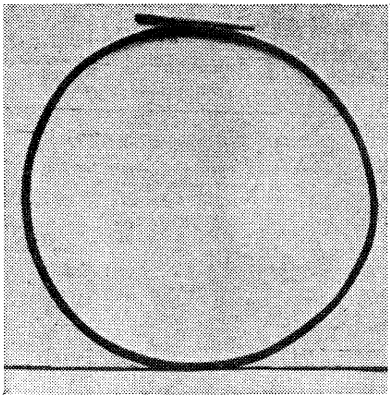

図2　木製の輪と棒
19世紀　直径92cm

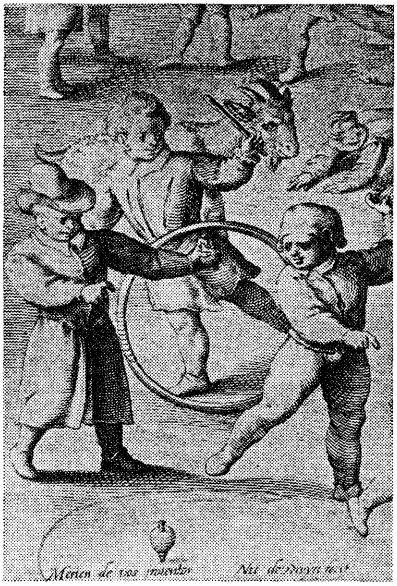

図5　マルテン・ド・ヴォス「輪回し」(部分)
(1610年頃，ド・ブライン発行)

図3　「輪回し」オランダのタイル画
17世紀中期

図6　「輪回し」オランダの版画の部分，
18世紀

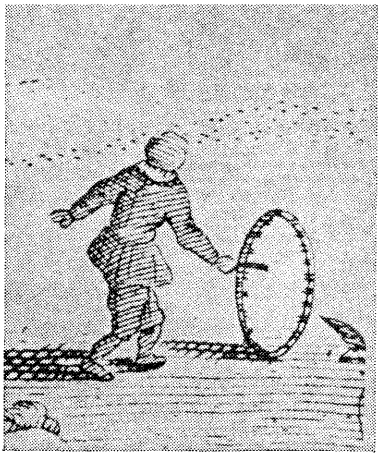

図4　E，シリマン「輪回し」(部分)
(カッツ『結婚について』1642年より) 銅版画

なお、一八六九年六月二十三日付のある商業新聞にも、この遊びへの抗議を記事にしている。

ところで、輪回しは十七世紀においてもひじょうにポピュラーで、オランダの詩人ヴォンデルはこう謳っている。

「元気な子供の群れにともなわれ、
街中を、
カランカランと音立てて、
輪を回していった……」[注5]

遊び方はきわめて単純で、ブリューゲルの絵や十七、八世紀の版画(図5、6)、またそれより少し後のオランダのタイル画(図7)にみられるように、子供たちは片手に短い棒をもって、輪をたたきながら、ころがすのである。ガイラー・フォン・カイゼルベルクの『エメイス』(一五一六年)にも、「輪をころがし、その上を棒で打つ子供……」[注6]と叙述されている。

図7 「輪回し」オランダのタイル画 17世紀後半

図8 「輪回し」(ルーマー・フィッシャー『寓意人形』1614年より)銅版画

興味深いのは、ルーマー・フィッシャーがその著『寓意人形』（一六一四年）の中で、この輪回し遊びに「静かにしている方がよい」（図8）という格言を与えている点である。さらにテキストには、「何ら有益でない仕事に、汗水たらし疲れるよりは、むしろ静かにしている方がよい」[注7]と注釈をつけている。

このほか十七世紀オランダの詩人ヤコブ・カッツも「輪回し遊び」を、いつも同じ人生を繰り返す人間への警鐘として、こう比喩的に謳っている。

「輪回し遊びの子供をみると、
まるである人間の姿を示しているようだ。
一生の間、ひとりで、自分の昔のやり方で、
生きている人間の姿を。
彼は太陽を見、月を見る。
空が、回っているのを見る。
彼は時とともに回る。
しかし彼はもといたところに再びもどる。
彼は全行程において、
多くの人びとと同じように行為する。
彼は新しい年がめぐって来ても、
同じようにし、
何ら変化をかんじない。
彼は顔にしわが沢山寄っても、
まだ昔と同じ遊びをしている。[注8]」

23、輪回し（女）De Meisjeshoepel（図9）

種々のオランダのタイル画をみると、この遊びは主として男の子の楽しみだったようだ。しかしブリューゲルの絵では、女の子（見方によっては男の子にも見えるが）も輪回しをしている。ただその違いは、女の子の輪の内側には同じ間隔で六個ないしそれ以上の金属片（鉄屑）がつけられ、輪が回るたびにカタカタという音がした。しかしそれが22番で述べた、男の子用の輪についた硬貨や鉄屑のそれとどう違うのか確証できないが、しかし作例でみるかぎり、男の子の輪には大抵何もつけられていない場合が多い。後に女の子用の輪には鉄屑の代わり

に、銅の鈴がつけられ、チリンチリンと可愛いい音をたてたのである。

24、樽栓の穴から叫ぶ Door 't Bomgat roepen（図10）

男の子も女の子もこの遊びが好きで、樽栓の穴に口をつけて高い声や低い声で叫び空洞の樽の中で反響した声を楽しむ。この遊びは年少の子供に好まれたらしく、ブリューゲルの画面でも小さな女の子が画かれている。

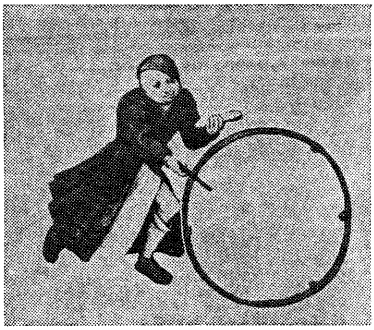

図9　ブリューゲル「輪回し」
（「子供の遊戯」の部分㉓）

25、シーソーごっこ Schommelen（図11）

二人の男の子が樽の上に馬乗りになり、両手をしっかりと樽の穴にかけ、片足が地面につくまで激しく左右に揺らし、シーソーごっこをしている。あるフランドルの地域ではこれを Kistje-weegaard doen（小さな荷箱を行ったり来たりさせる）と呼んでいた。

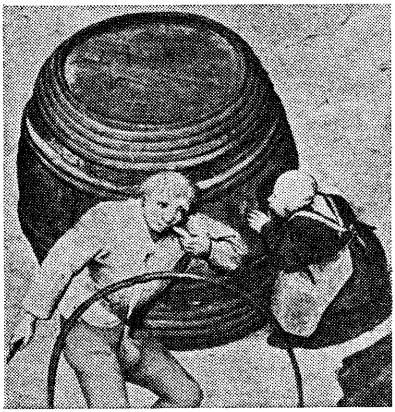

図10　ブリューゲル「樽栓の穴から叫ぶ」
（「子供の遊戯」の部分㉔）

図11　ブリューゲル「シーソーごっこ」
（「子供の遊戯」の部分㉖）

26、風船（豚の膀胱）遊び De Varkensblaas（図12）

秋も深まると、農夫たちは豚を山に連れて行き、どんぐりの実を沢山食べさせて肥らせ、やがて十一月か十二月に、屠殺する。豚の膀胱は元来、豆やそら豆を保存する壺代わりの役割りもするのだが、他方、子供たちはそ

図12　ブリューゲル「風船（豚の膀胱）遊び」（「子供の遊戯」㉖）

図13　「風船揚げ」
オランダのタイル画　18世紀

れを風船のようにして遊ぶのを楽しみにした。ブリューゲルの絵でも、女の子が豚の膀胱をいっしょけんめいにふくらませている。彼女はいっぱいに空気を入れてから、少しずつ空気を抜き、「ブブー」と鳴る音を楽しむのである。また右手でその皮をこすりながら、「キキー」と鳴る音を面白がる。またふくらませた皮袋で、友達の背中をたたき、その時の弾力度を喜んだりする。ほかに膀胱を藁の茎や葦に結んでふくらませ、後から紐でしっかり結んで、ゴム風船のように高く上げる遊びも流行した（図13）。

この遊びは古くから知られていて、十六世紀のガイラー・フォン・カイザーベルクの詩にもこう書かれている。

「豚を屠殺すると、
悪童たちは膀胱をとり、
それをふくらませ、その中に
三、四個の豆を入れ、音を立てる。
彼らはベーコンよりは豚の膀胱の方が好きなのだ」[注9]

十九世紀初期の銅版画（図14）にも、風船ごっこの子供についてこう記されている。

「愉快にふくらませよ、
ほっぺを丸くふくらませて。
わたしは豆入り風船がこわくて、
逃げたりはしない、と
妹のクララちゃんがいった。
ピート兄ちゃん。ダメダメ、
あんたはまだ私を知らない」。

図14　「風船遊び」トンプソンの「子供の遊戯」の版画 No. 127　オランダ　19世紀初期

単に遊びを描写したのではなく、教訓画に適用している例として、十七世紀のアドリアン・サードラの月暦版画「十二月」やコンラット・メイヤーの「子供の遊戯」(図15)がある。後者の画面では、大人たちが台の上で屠殺した豚を解体している。

その側で、子供が摘出されたばかりの膀胱をふくらませている。なお愉快なのは、一頭の豚が自分の運命を予期してしょんぼり立っていること、遠景で膀胱の風船を犬の尻尾(しっぽ)につけて、追い廻す子どもの姿であろう。そこには「この愚かな子供のように、わたしたちも時どき風を摑む」という教訓が記されている。

同じく十七世紀のオランダの詩人カッツは屠殺の季節を待つ子供の気持を、人びとへの教訓に寓意化している(図16)。とくに以下に引用する詩の後半に留意すべきで

図15　コンラット・メイヤー「風船遊び」,「子供の遊戯」より1657年

図16　E.シリマン「風船遊び」(カッツ『結婚について』1642年より)銅版画

あろう。

「子供は長い間待っていた、
そして何度も何度も考えた、
いつ屠殺の時期がやって来て、
牛（の膀胱）をふくらませることができるのかと。
だけど彼の目も、その思いすべても、
牛の肉をみてはいなかった、
子供は自分の食物については考えていなかった。
しかし長い時間の屠殺の大騒ぎも、
（子供にとっては）実に、ただの膀胱のためなのだ。
今や（膀胱に）いっぱい空気を入れ、
子供はその中に喜びを見出す。
しかし一回だけ、小さな針で突っついたなら、
まるくふくらんだもののもすぐペチャンコになる。
世の中には虚栄心の強い人が大勢いる。
彼は快楽とあらゆる希望をもち、
誰かが、
その人生を終えるのを待っている。
それは財産を分けるためではない、
彼はそんな性質の人間ではないから。
彼がわずかばかりの風、つまり小さな利益を得るためなのだ。
何か知らん、わずかな栄誉、
それもとくに見かけだけの栄誉のために。
ああ、人間とすべての奢侈よ、
それは一夜だけのものにすぎないのだ。」[注10]
カッツはこうして、食用の肉のことはどうでもよく、
もっぱら豚や牛の膀胱のみを玩具の対象と考えている子供、しかも空気をふくらませ、大きくなった風船を喜ぶ子供を謳いながら、実は虚栄心の強い大人の行為を喩しめているのである。

27、尻餅させる　Bofkonten（図17）

通常の遊びでは、二人またはそれ以上の少年たちがひとりの男の子の腕と脚をつかみ、何度も地面、ベンチ、テーブルの上にその子の尻をぶつけたり、投げ落とす。

体を曲げた別の男の子の上に落とすこともある。これは多く、ゲームで負けた子供への罰として行なわれた。ブリューゲルの絵でも、手足をつかまれた男の子は、重い梁の上に落されるため、恐怖の表情で身をかたくしている。他方六人の子供たちは愉快そうに悪ふざけを続けている。とくに左腕をとっている白い紙帽子の男の子は、何か掛声をかけて仲間の大将のようである。

図17　ブリューゲル「尻餅させる」
（「子供の遊戯」の部分㉗）

28、牡山羊、牡山羊よ、しっかり立て
Bok, Bok sta vast（図18）

27番と同じ梁の上に、第一の男の子が腰を下ろし、両手をお椀の形になるようひざの上で合わせる。その上に第二の赤い帽子の男の子が顔をのせ、身体を曲げる。第三の男の子は両腕を第二の男の子の腰に回わし、同じようにする。こうして牡山羊となった二人の上に、さらに

図18　ブリューゲル「牡山羊，牡山羊よ，しっかり立て」（「子供の遊戯」の部分㉘）

第四、第五の男の子が馬乗りになる。まず騎手になった第五の男の子が、頭上に指の角をたて、「しっかり立てよ、牡山羊君、僕の頭に何本の角があるかい」と聞く。もし先頭の山羊君がその数を云い当てたら、騎手と山羊は交代になる。ここで面白いことは、山羊役の子供が体を揺らし、振り落そうとすることである。十九世紀前期のオランダの版画（図19）に「牡山羊、牡山羊、しっかり立て、ピエト、何本あるかい。そこに5本あるよ。あ

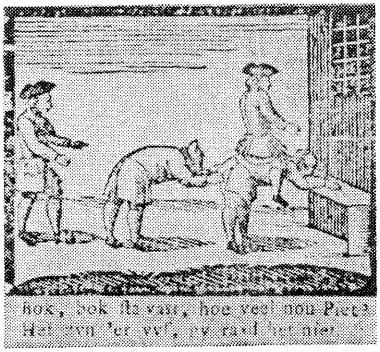

図19 「牡山羊よ，しっかり立て」J・ウェンデルの「子供の版画」No. 24 19世紀前期

図20 マルテン・ド・ヴォス「牡山羊よ，しっかり立て」(1610年頃ド・ブライン発行)銅版画

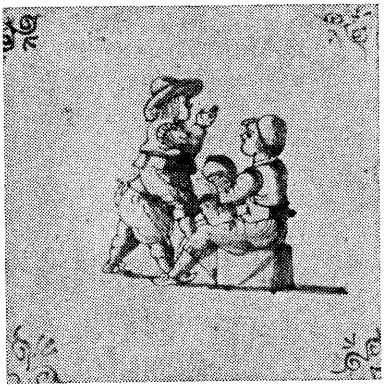

図21 「牡山羊よ，しっかり立て」オランダタイル画 17世紀中期

あ当たらない」という可愛いい詩が添えられている。

この当てごっこには種々のヴァリエーションがあり、他にポピュラーなものとして、「ハンマー、はさみ、ナイフ、スプーン、フォーク、桶のどれか」（図20、21）というもの。その場合、こぶしがハンマー、人差し指と中指がはさみ、人差し指のみがナイフ、掌に窪みを作ってスプーン、三ないし四本指（親指以外）でフォーク、両手を合わせて桶を表わす。ほかに「肉切り庖丁（手を

水平に立てる)、スプーン、目がね(親指と人差し指で目がねを作り、のぞく)、はさみか」という聞き方もある。[注11] ブリューゲルの絵で、第五の男の子が左手を掲げているのは、おそらくこの中の「スプーン」を意味しているのではないだろうか。十六世紀のフランドルの辞書編纂者キリヤーン(一五七四年)によると、十種類の呼び名があったという。[注12]「お聞きよ、若旦那さん、私は上手に馳けますか」Koekoek heerken rijd' ick wel?「牡山羊が柵を乗り越えて逃げる」Bock over haghe spelen、「牡山羊ごっこ」bocken spelen、「牡山羊の上に乗る」bocken setten、「牡山羊の角ごっこ」bock-horen spelen、「牡山羊の流し目ごっこ」blick-spel spelen、「小馬を駆く」peerdeken wel bereydt、「いとみごっこする」kievel-kavel spelen、「指遊び」vingher-spel spelen、「ピック、オリまたはグラーフ」pick olie oft graef(いずれも農具の名に関係し、ピックは鍬の意味で、騎手は一本指を示す。オリの意味は不明だが、二本指を出すのでおそらくレーキ、グラーフはシャベルで手を突き出し、掻く動作をする)など。

図22 「牡山羊よ,しっかり立て」(ルーマー・フィッシャー『寓意人形』より,1614年)銅版画

十七世紀のルーマー・フィッシャーの『寓意人形』(図22)では、三人の男の子が組になって遊び、騎手役の男の子は人差し指を立てているから、「ナイフ」を意味しているのであろう。版画にはセネカの「われわれはこゝギリシャの場所にいる」を引用し、さらにこう記されている。

「ひとがここで十分に理解できることは、借主の傲慢や

幸運も不安定でくずれやすく、つねに隣国の君主や抑圧された臣下の手中に握られていることである。後者は主君を背にのせながら、どんな風にして思慮のない僭主を突き落とすことができるかを考え、叛乱のチャンスをねらっている……」。[注13] つまりこの地上の為政者に対して、権力の存在は不安定で偽瞞的である、ことを知らせている。

29、お店屋さんごっこ Winkeltje houden（図23）

画面の前景右端で、白い帽子の女の子がお店屋さんごっこを興じている。彼女は、27、28番と同じ粱を台に使っている。商品は赤レンガを削り、粉にして計売りをしたり、紙を三角形にして、一袋単位で売ったりする。彼女の近くに〝ストック〟としての別のレンガがある。また手前に一個のレンガが置かれているのは、店のしるし、それとも扉を意味するのであろうか。計りは小さな木の椀二個に紐を通して作ったもの。小石が重りの役割りをする。商品となるものはレンガの粉を削った高価な香料サフラン、また床の装飾用の白粉を小麦粉、すいば（酸葉）の茎をお菓子、湿った砂を型押しに入れてパンやクッキー、どんぐりや桜んぼうの種、漆喰の小片で棒砂糖、レンガのかけらでボンボン、炭でオーヴン用の石炭とした。お客さんは瀬戸物の破片を硬貨代わりとする。とくに無地の破片は小銭、花のついたのは銀貨とみなされた。破片の大きさや美しさに、お金の価値が定められたのである。[注14]

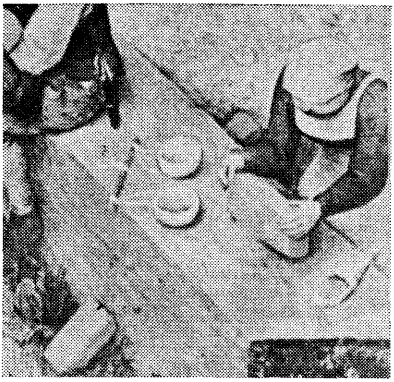

図23　ブリューゲル「お店屋さんごっこ」（「子供の遊戯」の部分㉙）

この「お店屋さんごっこ」は主として女の子の遊びとされ、彼女たちは通常、机の上とか開かれた窓の桟を台

として遊んだ。

ガイラー・フォン・カイザーズルクはこの遊びをこう叙述している。

「子供たちは互いにやさしくし、サフランを作り、着色された香料とか、甘い香料、生姜、そしてレンガを削り、粉を作る。それから小さな家を作り、料理をする。夜になると、それは終りとなり、倒してしまう[注15]。」

(東京工芸大学)

注1 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verklaard*, Antwerpen 1941, p. 4.

注2 A. De Cock en Is Teirlinck, *Kinderspelen en Kinderlust in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. V, p. 217 f.

注3 W. P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel vóór de Zeventiende Eeuw* (Dissertation, Leiden, 1914), p. 135.

注4 Drost, *ibid.*

注5 Joost van den Vondel (1587-1697) の詩は Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspiele 1560*, Wien 1957, p. 16 から引用。

注6 Geiler von Kaisersberg, *Emeis* (1516) は V. Zingerle, *Das Deutsche Kinderspiel im Mittelalter*, Innsbruck 1873, p. 23. から引用。

注7 R. Visscher, *Zinne-poppen*, Amsterdam 1914.

注8 Jacob Cats, *Kinder-spel*, Saint-Omer 1855, pp. 74-76, 原書は *Huwelyck*, Amsterdam 1625.

注9 Kaisersberg, *Brösamlin*, は Zingerle, *op. cit.*, p. 49. から引用。

注10 Cats., *op. cit.*, pp. 26-30.

注11 「牡山羊よ、しっかり立て」については以下の文献を参照。De Meyer, *op. cit.*, p. 5. Hills, *op. cit.*, pp. 18-19. G. Hartmann en E. Kens, *Hééé Jóh*! Amsterdam 1976, p. 54.

注12 C. Kiliaan については Jan Pluis, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, p. 108 から引用。

注13 C. G. Stridbeck, *Bruegelstudien, Untersuchungen zu den ikonologischen Problemen bei Pieter Bruegel d. Ä.*, Stockholm 1956, pp. 189-190. Visscher, *ibid.*, p. 160.

注14 Cock en Teirlinck, *op. cit.*, Band I, pp. 294-308.

注15 Kaisersberg, *Brösamlin*, 1517 (J. Pauli の翻訳), Bd. XII.

(続く)